福井県文書館講演

# 福井県と兵庫県の秘めたる関係

## ー北前船から市街造成・鉱山開発までー

松田　裕之*

はじめに
１．前史としての北前船の時代～越前・若狭の北前船主と工樂松右衛門～
２．神戸市街造成と福井藩の人びと～関戸由義とその一族の暗躍～
おわりに

### はじめに

ただいま御紹介に与(あずか)りました松田裕之と申します。本日の講師を仰せつかりましたこと、まことに光栄です。併せて、今月（2022年８月）、福井県を襲った豪雨被害に対して、心よりお見舞い申し上げます。

改めまして、私は大阪湾内の神戸港に浮かぶ人工島、ポートアイランドにある神戸学院大学の経営学部で、労務管理論や経営管理総論を教えています。「経営学者がどうして今回登壇することになったのか？」と首を傾げるむきもございましょうが、じつは随分前から幅広い文筆活動に鞍替えし、歴史ドキュメントを執筆して参りました。

本日はそうした文筆活動から得た知見をもとに、福井県と兵庫県の、これまで余り語られてこなかった縁(えにし)について、何人かの人物の足跡(そくせき)を題材として、お話しいたします。

まず、両県の位置を地図（**図１**）で確認しておきます。福井県は、その昔、越前と若狭の二国から成り、小浜、敦賀、三国といった湊が、北前船による買積(かいづみ)交易で栄えました。

買積というのは、物資の輸送で運賃を稼ぐ賃積(ちんづみ)とは異なり、各地で買い入れた商品を利益の見込める湊に運び込んで高値で売るという、時間差と空間移動がもたらす商品の価格差を利用した差益獲得の商法で、まさに貿易の原点ともいえます[1)]。

**図１　兵庫と福井の位置関係**（西山芳夫『西廻り航路の港町をゆく』（文献出版、2000年）p.48を加工・転載）

＊神戸学院大学経営学部教授

ついで、兵庫県のほうに目を向けますと、昔の摂津・播磨・但馬・丹波・淡路という五国（ごこく）から成っております。12世紀初めに平清盛が日宋貿易の拠点とした摂津国兵庫津（ひょうごのつ）（現・神戸市兵庫区湾岸域）が、江戸後期からは大坂－瀬戸内沿岸－日本海沿岸－蝦夷地を結ぶ「西廻り海運」と、大坂－尾張－江戸を結んだ「南海路」の結節点として機能し、西日本有数の港湾都市として栄えました。

そこで、本日の講演の前半部は、海上交易をめぐる福井・兵庫両県の関りについてお話していくことにいたします。

## 1. 前史としての北前船の時代～越前・若狭の北前船主と工樂松右衛門～

御存知のように、日本列島は南北に長く、その中央に峻険な山脈が走っております。陸路・空路が発達した現在ならいざ知らず、道路・鉄道網が急速に整備・拡張される明治時代以前に、物流の主役を担ったのは廻漕（かいそう）と呼ばれる海上輸送でした。この廻漕に従事する船舶を廻船と呼びます。

廻漕の航路（ルート）としては、大名領や天領（幕府直轄領）の年貢米や御用荷物を積んで江戸－大坂間を往来する定期航路の「南海路」に加えて、江戸中期には河村瑞賢（かわむらずいけん）（瑞軒）という人物が、幕府の命を受けて、「東廻り海運」と称される江戸－東北太平洋岸諸港を結ぶ航路、そしてさきほどもふれました「西廻り海運」と呼ばれる大坂－瀬戸内－下関－日本海－蝦夷地松前・江差を結ぶ航路を開拓しました。ちなみに、瑞賢の本職は材木商でしたが、海上輸送や治水の手腕に長け、摂津・和泉、つまり現在の大阪府大阪市・堺市域の大規模な河川改修も手掛けております。

この瑞賢の東・西廻り両海運の開拓によって、**図２**に示しました列島を一周する内海航路が成立したわけです。さきほど挙げた現在の福井県域に属する小浜、敦賀、三国といった諸湊は、西廻り海運における北国筋の拠点となりました。

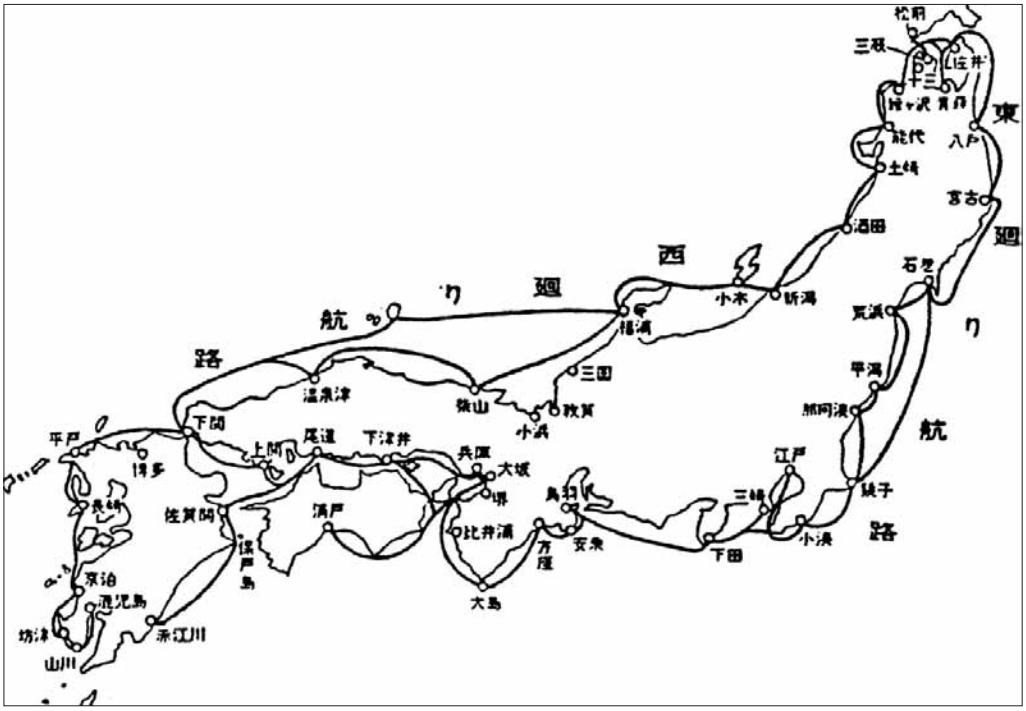


図２　江戸期内海海運航路図（西山芳夫『西廻り航路の港町をゆく』（文献出版、2000年）p.104を加工・転載）

じつは瑞賢が「西廻り海運」を拓く前、日本海－蝦夷地交易は商売上手で聞こえた近江商人の独壇場で、彼らは蝦夷地・東北の物産を北国筋湊の船主の北国船で敦賀・小浜に廻漕し、そこから琵琶湖の北端＝湖北に陸送、丸子船という湖水運搬船に積み替えて大津に運び、河川舟運や陸運で京・大坂に持ち込んで高値で売り捌き、今度は京・大坂の物産を逆ルートで東北・蝦夷地に持ち込み、これまた高値で売り捌くという、いわば鋸商法で莫大な差益を稼いでいました。

でも、「西廻り海運」が拓かれると、近江商人による海・陸・淡水併用型の差益商法は勢いを失います。その理由は、山陰沿岸を経て下関から瀬戸内を通って兵庫・大坂にいくほうが、海路上では一見遠回りに見えても、海・陸・淡水の３本立て輸送よりも、時間と経費が相当節約できたからです。

こうして、いわゆる北前船の時代が幕を開けます。一般に「北前」の俗称で知られるのは、いわゆる塩飽諸島、瀬戸内海域の岡山県と香川県に挟まれた西備讃瀬戸に浮かぶ大小合わせて28の島々ですが、そこで用いられてきた弁財船という船型です。「弁財」の由来には諸説ございますが、瑞賢が東･西廻り海運の開拓に際して採用したのがこの船でした。弁財船は、狭い海域に島が群集し、そのはざまを潮流がめまぐるしく変化するなかを、貨物を積んで航行するのに最適な船型でした。平底構造の堅牢な造りで、巨大な一枚仕様の帆装で風を捕えて、船尾に装着した大型の舵で機動的な操船ができ、逆風走行も可能という優れもので、船体のサイズは時代を経ると大きくなり、「千石」と形容される大型の廻船も建造されます。

江戸幕府は開闢以来、「人は陸を、物は海を」という交通運輸方針を貫きましたが、廻漕は陸運を遥かに凌ぐ速度で大量の物資を長駆輸送できる反面、時々刻々変化する天候・風浪・潮流の影響を受けて予定以上の日数を要することも珍しくはありません。円滑な廻漕の実現には、自然をときに活用し、ときに克服する工夫が欠かせない。これに生涯を捧げたのが、工樂松右衛門という人物です。

私は2022年４月に『近世海事の革新者　工樂松右衛門伝－公益に尽くした七〇年』[2] を上梓しました。松右衛門の御子孫からの「是非、工樂松右衛門の生涯を正しく伝えて欲しい」という依頼を受け、工樂家秘蔵の文書類を特別に閲覧・使用する許可を得て書き上げたもので、工樂家の方々にも「由」との御墨付きを頂戴しました。現時点において最も正確な伝記と自負しております。松右衛門の生涯と事績につきましては、**巻末資料１** に概略を記しております。

寛保３年（1743）に播磨国加古郡高砂（現・兵庫県高砂市）に生まれた松右衛門は、十代で西国有数の海運拠点・兵庫津に出て、廻船業兼船具商を営む鍛冶屋善兵衛の入り婿となります。やがて兵庫津の商業界を取り仕切る豪商・北風荘右衛門貞幹に海事百工の才を愛でられ、北風別家の船具商・喜多二平の支援を得て、廻船の動力となる風を効率的に捕える画期的な帆布を開発。これが天明５年（1785）のことで、本格的な商品化は寛政２年（1790）のことです。

柔軟性・速乾性・耐久性に優れた木綿一枚織の帆布は、「松右衛門帆」の名で廻船業者の人気を博します。その特長は、帆布同士の繋ぎ合わせを行う「耳」と呼ばれる両端部を畝織＝コール天織にして強度を高め、本体部を平織にして柔軟性と軽さと速乾性を持たせたことです。

この帆布は、舵の大型化や船磁石の利用とともに、あるいはそれら以上に、廻船の航行性能の向上に多大な貢献を果たしたといわれています。いまならさしずめ、爆発的な駆動力を持つ新たな内燃機関＝エンジンを開発したようなものですね。

ついで、松右衛門は港湾普請用の船舶や工具を考案。現在の浚渫船やサルベージ船の原型ともいえるこれらを駆使し、各地の港湾整備に尽力します。その足跡は、備後鞆津（現・広島県福山市鞆地区港湾域）、伊予宇和島奥浦（現・愛媛県宇和島市吉田町奥浦）、自身の故郷である高砂湊から、遠くは蝦夷地と呼ばれた箱館（現・北海道函館市）やエトロフ（現・北方領土択捉島）にまで及びます。ちなみに、松右衛門が蝦夷地における港湾普請に関与したのは、兵庫津の独立系廻船業者・高田屋嘉兵衛の推挙によるものです。嘉兵衛はいち早く買積交易に手を染め、蝦夷地に進出して、同地の幕府役人に接近していました。松右衛門の「工樂」という一風変わった姓は、蝦夷地での港湾普請を箱館奉行所より称されて下賜されたものです。

このような松右衛門の海事技能者としての活躍時期は、奇しくも近江商人が日本海・蝦夷地交易の主役の座から降りたあとに、運賃収入の減少に直面した北国筋の船主たちがみずから廻船経営に乗り出した時期に重なります。彼らは近江商人や北陸諸藩の雇船から脱却し、さきに申しました買積活動を本領とする北前船主へと飛躍していくことになります。

若狭小浜の古河屋は丹波茶を新潟・秋田方面で販売し、その帰途に買った米や海産物を瀬戸内諸湊や兵庫津・大坂で売り捌いて豪商になりました。現在、小浜市北塩屋には文化12年（1815）に五代目嘉大夫が建てた護松園が県有形文化財として残っています。

北陸第一の湊で、九頭竜川河口に位置し、竹田川・足羽川といった河川が合流、古くから河川舟運の要衝として栄えた三国湊からは、足羽山で採掘された笏谷石が、バラストも兼ねて北前船に積み込まれ、全国各地に運ばれました。材木商の岸名家や銀行経営で有名な森田家は北前交易によって財を成し、地元の発展に貢献しました。彼らが航海で必需品とした船箪笥は、三国湊産のものが堅牢にして巧緻な細工で、北前交易に従事する船頭衆の人気を呼んだといわれています。

また現在、越前海岸南端、敦賀湾のほぼ入り口に位置する福井県南条郡南越前町の河野浦には「北前船主の館」が残っていますが、その主である右近家は1700年代末に蝦夷地江差に航海して買積活動に着手し、御雇運送業者から北前船主へと飛躍する機会を掴みます。1800年代に入ると、右近家あるいは中村家といった船主が蝦夷地－日本海－瀬戸内－大坂を結ぶ西廻り海運を大型廻船で往来して巨大な富を蓄積、江戸後期から明治期半ばまで続く北前船の時代に、河野浦に空前の繁栄をもたらしました。

ところで、松右衛門は自身の開発した帆布の織り方を敢えて秘匿せず、教えを乞う者に惜しげもなく伝授、その普及を以て廻漕の効率化を促し、民益の向上に資することを本意としました。そのために、各地で松右衛門仕様の一枚織の帆布が製織されたようですが、やはり兵庫津で販売される、いわば「純正品」と比較すると、品質面で随分と差があったようです。北国筋の船主たちも兵庫津に手船（所有船）を寄港させた折には、純正の松右衛門帆を購入したことでしょう。

とにもかくにも、さきに名を挙げた越前・若狭の船主たちが、業態を賃積運送から買積交易に転換して北前船主へと成長していくプロセスと、兵庫津で海事の異才が開発した革新的な帆布が廻船の航行性能を向上させていくプロセスが重なり合うことは、福井県と兵庫県が海を介して結んだ縁と申せましょう。

このほかに、両県の海繋がりといえば、やはり幕末期の文久年間（1862～63）に幕臣・勝海舟が摂

津国八部郡神戸村（現・神戸市中央区海岸通）の商人・網屋吉兵衛の築いた船蓼場、これは船底に付着した虫を燻して除去する施設ですが、そこに海防を睨んで海軍操練所を開設する際、門弟で土佐浪人の坂本龍馬を越前福井藩主・松平慶永＝春嶽公のもとに派遣して資金融通の交渉にあたらせたという、名高い逸話がございます。これについては福井県のほうで随分と研究が進んでいることから、私が敢えて語る必要はないと思いますので、ふれるに留めます。

## 2. 神戸市街造成と福井藩の人びと～関戸由義とその一族の暗躍～

では、前半部はこれにて終了します。話は後半部、本日のメインテーマに入ります。時代は江戸から明治に代わり、福井・兵庫の両県もまた新たな局面を迎えました。とくに兵庫においては、慶応３年12月７日（西暦では1868年１月１日）に海軍操練所跡一帯が神戸港として諸外国に開かれて、外国人居留地も設けられ、現在の国際貿易と観光で鳴る「ミナト神戸」の原型（**図３**）が築かれていくこととなったのです。

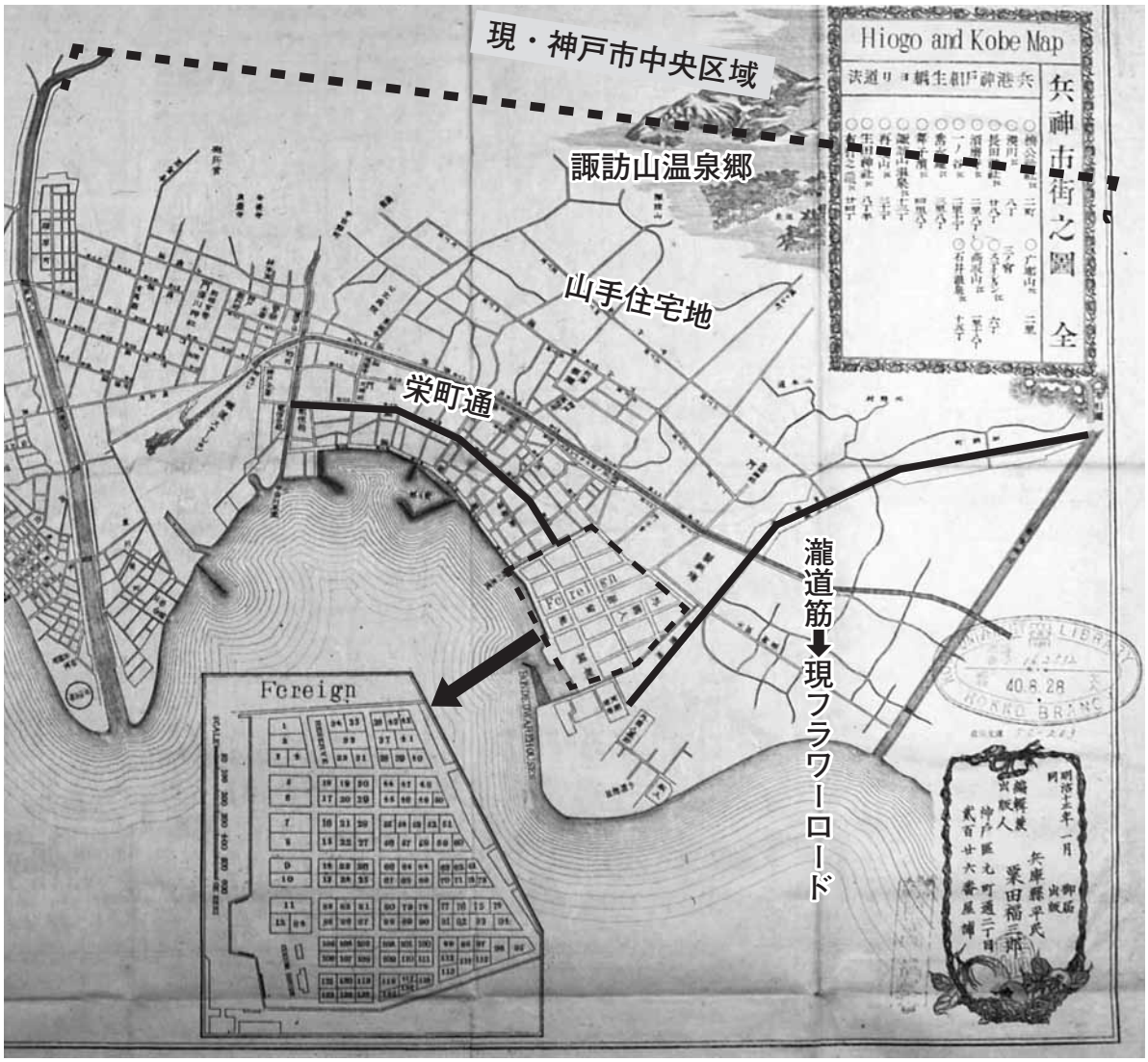


**図３　明治期神戸・兵庫市街地図**（村田誠治編『神戸開港三十年史』（神戸開港三十年紀念會、1898年）の折り込み地図を加工して作成）

現在、神戸ルミナリエ会場の東遊園地から元町大丸百貨店にかけての旧外国人旧居留地、山手の北野坂に並ぶ洋館群、新神戸駅からケーブルカーでゆく布引瀧、諏訪山展望所から眺める百万ドルの夜景……観光ガイドやサイトで取り上げられ、皆様がイメージされるエキゾチックでファッショナブルな神戸は、現在の神戸市中央区域のことなのですが、じつのところそこは勝海舟が海軍操練所を開き、神戸港の礎を築くまでは、とても繁華の地とは呼べない寒村、つまり神戸村でした。そんな神戸村が「ミナト神戸」へと変貌を遂げていく土台を作ったのが、これからお話しする、越前福井城下出身の奇妙な人物です。日本放送協会（NHK）が土曜日夜７時30分から放送している、あの人気地理番組に擬えれば、「国際都市神戸を造ったのは福井県人?!」ということになるでしょうか。

ただし、この人物の活躍はむしろ「暗躍」と称するほうが相応しく、本講演のタイトルに「秘めたる」というタームを挿入したのは、「これまで余り知られていなかった」という意味もありますが、「語るにいささかの憚りあり」という意味も含まれております。

関戸由義、この人物が本講演の後半部の主役であります。読み方は判然とせず、「ゆうぎ」「よりよし」「よしつぐ」等ともいわれておりますが、生前の彼と繋がりの深かった三井組、現在の三井グループのアーカイブでは「よしつぐ」と読ませております。関戸由義のものと伝えられる肖像写真を載せておきました（**写真１**）。本講演のポスターにもフューチャーされていますが、なかなかの面貌と申せましょう。

**写真１　伝・関戸由義肖像写真**
（川嶋禾舟「関戸由義氏事蹟一斑」（『兵庫史談』２巻６号、1933年）より）

大阪湾内に巨大な港を擁する国際貿易都市にして観光都市である神戸市の原型は、慶応３年12月７日（1868年１月１日）の開港から明治10年（1877）までの10年間に、その粗方ができあがりました。その青写真を作ったのが誰あろう、関戸由義なのです。

けれども、兵庫県でも、また福井県でも、この関戸という人物に関する検証らしい検証は、これまでほとんど行われてこなかった。そのことに興をそそられ、「それでは」と調査を開始し、2017年に『港都神戸を造った男－《怪商》関戸由義の生涯』[3] を上梓しました。

ここからは拙著によりながら、関戸由義を中心に紡がれた越前福井の人びとと「ミナト神戸」の発展をめぐる奇妙な群像劇に語りを移してまいります。これは同時に、掴みどころのない、曰く言い難い、ドラマでもあります。皆様には些かの辛抱を持ってお聞き願えれば幸甚です。

最初に、関戸という人物の出自についてお話ししますが、じつは関戸が越前福井城下の出身であることを裏付ける史料にたどり着くまでには、少々時間を要しました。ヒントとなったのは、関戸に論及した既存の諸研究にしばしば登場する福澤諭吉との親密な交流です。

慶應義塾編纂の『福澤諭吉書簡集』[4] を調べたところ、福澤が知人に宛てた書簡のなかに「私知人

関戸良平と申人」〔明治５年11月７日付島津復生宛〕という記載を確認できました。島津は福澤の主家、中津藩（現・大分県中津市）奥平家の重臣で、福澤が最も信頼を置いた人物です。こうした福澤の書簡類を丹念に調べた慶應義塾大学福澤センターの西澤直子教授の論文に、松平文庫収録の福井藩人事資料『新番格以下増補雑輩』[5]（以下『雑輩』）のことが記されておりました。

早速、デジタルアーカイブ福井で『雑輩』を閲覧すると、最終丁に「横濱也　輪違関戸良平」の記載がございました。**図４**の左に、その筆耕を載せてあります。

そこで今度は筆耕にあります「明治二巳十二月四日民部省通商少佑申付候事」という一節に従って、『明治三年大蔵省官員録』[6] を調べたところ、**図４**の右にある「通商司　少佑」欄に「福井（朱書）関戸良平」の記載（四角囲み）を確認できたのです。

この「関戸良平」が「関戸由義」と同一人物であることは、『明治初期官員録・職員録集成』[7] に採録された明治３年２、４、５、６、８、10、11各月の「大蔵省通商司少佑」欄の「源由義関戸」という記載からも裏付けられました。

とはいえ、関戸がもし福井藩士に属する身分の人間ならば、藩政期における経歴も『雑輩』に記載されているはず。この点について、福井県立図書館の長野栄俊様（現在は福井県文書館主任）に御意見を求めたところ、「民部省に出仕した関戸良平の名が『雑輩』に収録されたのは、彼が本来は人事諸記録の採録対象となる身分ではなく、また、そうした身分の者の子弟にも該当しなかった。にもかかわらず、新政府の役人＝官員となったために、藩としては、改めて彼の名を把握しておく必要が生じたためではないか」という教示を頂きました。

確かに、関戸以外の『雑輩』収録者を眺めても、維新後に官員身分を得た者や医療の現場業務に就いた者の記録も見られ、こうした人たちもまた藩政期の経歴がほとんどありません。『雑輩』の記載と長野様の説明から、私は関戸が「藩士」の範疇に含まれず、明治維新による封建的身分制の終焉を機に、己が才覚のみを頼りとして立身を遂げた人間と判断しました。

さて、関戸は明治３年（1870）12月５日に通商少祐を免ぜられ、翌年３月24日に外務局勧業課少属として兵庫県庁に出仕しております。これ以降の関戸の事績については、神戸市文書館、神戸市立中央図書館、神戸市立博物館、兵庫県政資料館、神戸大学附属図書館、神戸地方法務局等に残る文献史料で比較的容易に追跡できます。

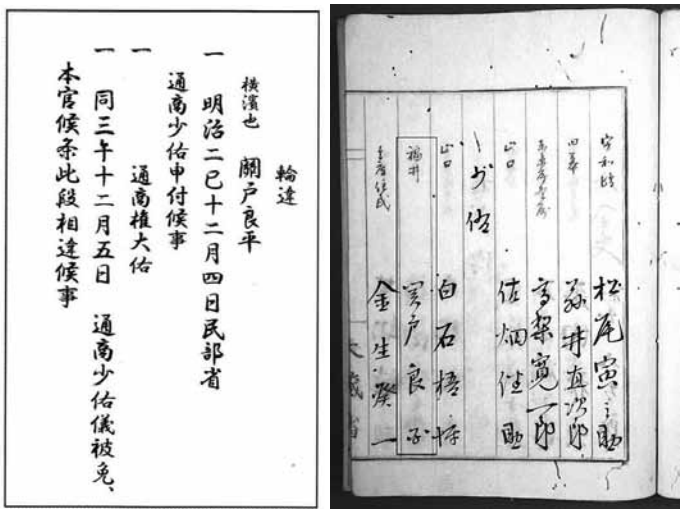


**図4　松平文庫『新番格以下増補雑輩』記載履歴筆耕と『明治三年大蔵省官員録』**
（左：福井県文書館保管 松平文庫『新番格以下　増補雑輩』収録「関戸良平」を筆耕。右：『明治三年大蔵省官員録』国立国会図書館デジタルコレクションより）

その事績を総括すれば、**巻末資料２**の略譜にありますように、開港まもない神戸に洋風小学校を私費で建て、兵庫県官として貿易行政に手腕を発揮す

るとともに、**図3**にある神戸の二大幹道、すなわち海手と山手を結ぶ南北道の瀧道筋〔現フラワーロード〕と、神戸港・居留地と開業間もない神戸駅を結んだ東西道の栄町通を造成、さらに、山手の高台に住宅地と碁盤状の街路を整備し、市民の憩いの場として大規模アミューズメントパーク諏訪山温泉郷を開発しました。地元の経済発展に資する人材を育成しようと、福澤の慶應義塾の支援を受けて商業講習所の創設に尽力、まさに「神戸市街造成の立役者」というにやぶさかではなく、「凄い」のひとことです。

ところが、民部省出仕から兵庫県官となるまでの、つまり明治維新前の関戸の足取りについては、私が本格的な調査を行うまでは、維新前夜の混乱に乗じて江戸市中で書画骨董・民芸品を安値で買い漁り、サンフランシスコに渡航してそれらを高値で売り捌いて巨利を博した、という実業成功譚の如きものが伝えられているにすぎなかったのです。

これらは多分に伝承の趣も強いのですが、私はそのなかで「サンフランシスコ渡航」に着目して調査を始めました。関戸が神戸近代化に果たした最大の貢献は、市街地整備計画の立案と幹道敷設・宅地造成事業の推進です。地理的条件とそれに適合した都市整備という観点から眺めれば、神戸市街はサンフランシスコ市街と共通する点が多いのです。

この関戸のサンフランシスコ渡航についても、長野様から貴重な教示を頂きました。1868年5月13、27日、6月17日付『The Hawaiian Gazette』（May 13, 27, June 17, 1868）に「関戸氏（Dr. Sekido）率いる日本人一行がアイダホ号でハワイを訪問し、呉服反物を地元の資産家に販売した後、アイダホ号でサンフランシスコに渡った」旨を報じた一連の記事が掲載されていたのです[8]。

『The Hawaiian Gazette』記事の日付と同じ時期に、サンフランシスコで活動していた日本人がいなかったかを調べると、のちに名大蔵大臣と謳われ、2.26事件で凶弾に斃れた高橋是清の存在を確認できました。慶応3年（1876）8月、和喜次と名乗っていた16歳の高橋は、仙台藩留学生としてサンフランシスコに到着しています。その回想記『高橋是清自伝』[9]に「越前の医者（中略）某というのが、維新の騒ぎに、いろいろの品物を二束三文に買倒して、それをアメリカに持って来て一儲けしようとかかった」という記述があります。じつは関戸、渡航直前まで江戸で町医者をしていました。

こうしたことから、私は維新混乱期に関戸がサンフランシスコへ渡航したことを事実と認定しても問題ないと判断しましたが、『幕末 明治 海外渡航者総覧』[10]を眺めても、当時、留学または視察のために海外渡航した人物約4,200名中に「関戸」姓の者は見当たりません。

関戸のサンフランシスコへの商用渡航は、正規ルートのものではない可能性があるのですが、そうなると、その実行は関戸ひとりでは難しい。信頼の置ける協力者が必要です。そして、そこには福井藩関係者の姿が見え隠れする。

ひとりは、安政5年（1858）に開港した横浜で福井藩の商館石川屋を差配していた岡倉覚右衛門。岡倉天心の実の父としても知られています。もうひとりは、横浜開港当初から来日して、石川屋にもよく出入りしていたオランダ系アメリカ人の実業家ユージン・ヴァン・リード。福井藩家老の本多敬義が叙した『越前藩幕末維新公用日記』[11]によると、岡倉は石川屋で生糸等を外商に売って藩財政を潤し、珍しい舶来物を輸入して藩士たちに喜ばれたほか、国内外の重要情報を収集して江戸藩邸に報告する藩の探索方も務めていました。内外の事情に通じたヴァン・リードは、良き商売相手であると

同時に、大切な情報源であったはずです。

このヴァン・リードという人物、薩摩藩士による外国人殺傷事件を描いた吉村昭の小説『生麦事件』[12] にも島津家の大名行列に礼を示した日本通の外国人として登場しますが、機を察するに敏で、営利に対する異様な嗅覚を持つ典型的冒険商人でして、慶応年間（1865～68）にはハワイ総領事の肩書を利用して日本人のハワイ移民事業を企て、慶応３年４月より２回にわたって神奈川奉行所から計350名分の旅券発行を受けています。

海外渡航希望者からすると、ヴァン・リードに依頼すれば、煩瑣（はんさ）な申請手続を経ずとも横浜発のチャーター船に乗り込むことができました。関戸は維新の混乱に乗じて利益を得ようと、岡倉とヴァン・リード両名の協力を仰ぎ、サンフランシスコへの渡航を実現させたと考えられます。

『The Hawaiian Gazette』記事には、関戸一行の通訳として “Zangimoto” あるいは “Yangimotu” なる人物も登場しますが、これは福井藩士の柳本直太郎であった可能性もあります。柳本は小坊主・表坊主を務めた後、藩より江戸就学を命じられ、幕府直轄の蕃書調所（ばんしょしらべしょ）を経て、慶応２年２月に福澤諭吉の慶応義塾に入塾。翌３年４月、藩命を受けてアメリカに留学しています。

『The Hawaiian Gazette』に名の見える “Zangimoto” あるいは “Yangimotu” がアメリカ留学中の柳本であったとすれば、岡倉がサンフランシスコに自邸を持つヴァン・リードを介して、関戸の渡米を前以て柳本に通知、現地で通訳として協力するように依頼したということなるでしょうか。関戸の非合法的渡航の裏では、こうした福井藩関係者の連係もちらつきます。

サンフランシスコより儲けを得て密かに帰国した関戸は、横浜商人の小西屋伝蔵に身を寄せ、猟官運動を行ったようです。そのことを示す文書（もんじょ）が**図５**に示した『貨幣之儀ニ付奉申上候書付（つきもうしあげたてまつりそうろう）』（以下『貨幣之儀』）。「横濱本町四丁目小西屋伝蔵厄介　関戸良平」が、「同弁天通五丁目門屋幸之助」との連署で、民部省に提出した建白書で、明治新政府が慶応４年（1868）５月に発行した不換紙幣＝金札

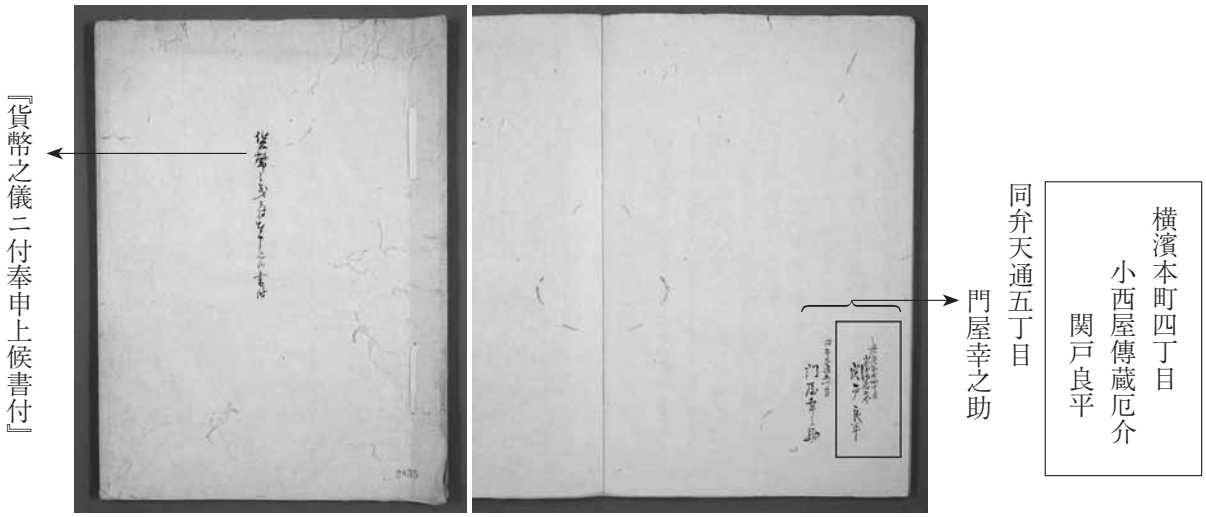


**図５　関戸良平が民部省に提出した建白書『貨幣之儀ニ付奉申上候書付』の表紙と裏表紙**
（大隈文書（早稲田大学図書館蔵））

の不備による居留地貿易の混乱を指摘し、その是正方法を提示しています。

『雑輩』に記された明治２年（1869）12月の民部省出仕は、この『貨幣之儀』を評価されてのことでしょう。『雑輩』の「関戸良平」という記名の上に添えられた「横濱也」は、任官当時の関戸の居住地を示したものということになります。**図６**は、慶応年間の横浜日本人街を描いたものですが、関戸が寄留した小西屋と門屋はご近所です。

なお、連署人の門屋幸之助（かどやこうのすけ）の本名は、伊東哲之助信保。実の父は将軍家主治医にして江戸に種痘所を創設した蘭方医学の泰斗・伊東玄朴（いとうげんぼく）です。穿（うが）った見方をすれば、関戸はいわば「抜け荷」に近い商取引で得た資金を活用し、門屋幸之助に建白書の代筆を依頼する一方で、横浜商人衆の人脈を介して任官工作を行った可能性もあるでしょう。

謎多き関戸の前半生が少しずつあきらかとなっていくなか、私は神戸市街整備計画に関する一次史料を確認すべく公益財団法人三井文庫〔三井家史料の収集や調査などを行う研究機関〕を訪ねました。明治初期、三井組は神戸の幹道となる滝道筋と栄町通の敷設や、北野や諏訪山に至る山手住宅地造成に多額の融資を行っていたからです。

三井文庫の書庫で関連する文書を探しているとき、偶然にも私は文書の束に隠されるかのように折り込まれた『關戸由義關戸左一郎戸籍写』[13]（以下『戸籍』）・『關戸左一郎身分内密取調書』[14]（以下『取調書』）を発見しました。

『戸籍』によって、関戸の生年月日は文政12年（1829）10月25日と判明。『取調書』の方は、関戸の弟とされる「關戸左一郎」が明治17年（1884）に貸金返済をめぐって京都三井銀行を訴えたことから、同銀行が裁判に備えて準備したものでした。

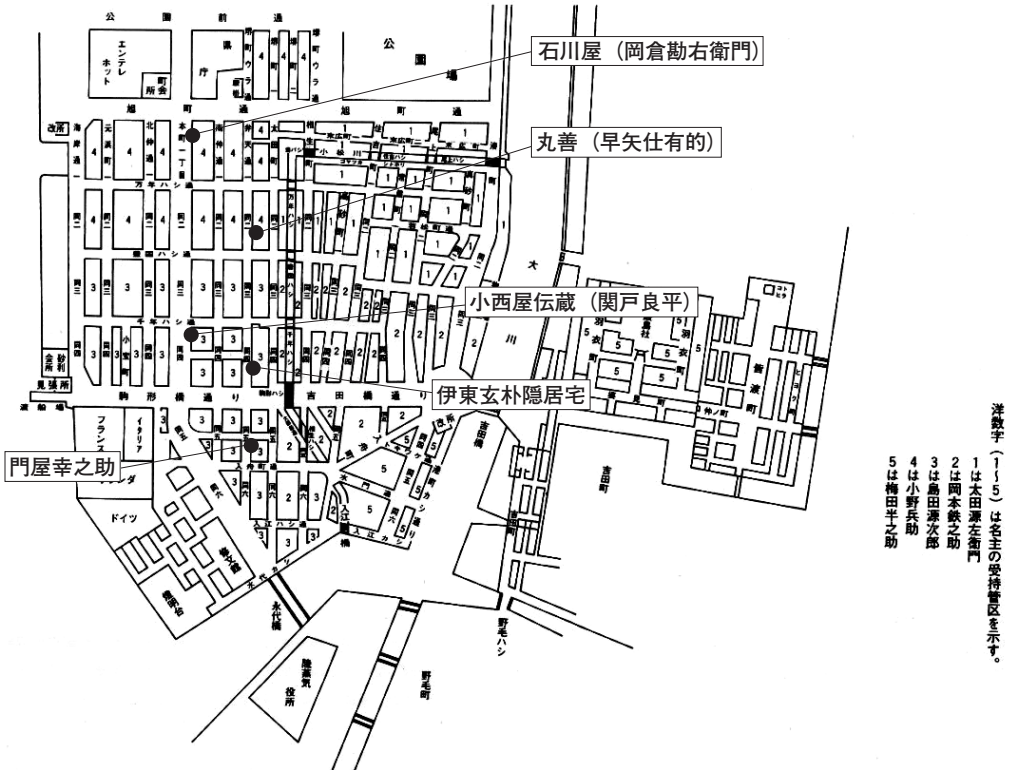


**図６　慶応年間の横浜日本人街略図**（横浜開港資料館『横浜町会所日記』（1991年）p.115をもとに作成）

この『取調書』に添付されたというか、さらに裏側に隠れるようにしまわれていたのが、三井が放った密偵による報告書『捜索原証』[15] でして、そこに驚くべき内容が記されていました。現代文に直しますと、おおよそこうなります。

「戸籍上、関戸由義・同左一郎は、福井城下亀屋町（現・福井市春山１丁目付近）の福井藩医・第四代山本正伯〔関彦輔〕の次男・三男となっているが、これは偽りである。由義は城下呉服下町（現・福井市春山２丁目付近）の薬種問屋輪違屋の分家で、煎薬業を営む第四代輪違平兵衛と山本家に乳母奉公していた女性との間に生まれた。幼名を良平と言い、正伯のもとで下男奉公していたが、父平兵衛の死去にともなって輪違分家を相続。しかし、本家筋の妻女と密通した廉で家財没収・越前追放の刑に処される。その後、良平は京都の按摩師山口家の食客となり、同家の子女フサ（ふさ）と結婚。このフサの実弟が左一郎である。慶応年間、良平一家は京都を去って江戸に赴き、素人医者を開業。この頃より、良平は関戸姓をもちい、名も『由義』に変えている。洋行後、官途に就くが、任官中に福井旧知事と相謀り、神戸で事業を起こすこととなった。その間、左一郎は由義の長男慶治の後見人を託されている。なお、本来ならば「詐称」の被害者であるはずの山本家の第五代正伯〔山本正（のちに「まさし」)〕 は、由義といまも親密に交際している」

輪違良平が本家筋の妻女と密通した件については、福井県文書館蔵『坪川家文書』[16] の明治５年（1872）８月13日条にも関連する記載があるとの教示を同館の堀井雅弘様より賜り、デジタルアーカイブ福井にてその個所を確認しております。

『捜索原証』のなかで鍵となるのが、関戸に「実の父」と詐称された第四代山本正伯です。正伯については、長野様から松平文庫『姓名録　七　ムウノクヤ』[17] 収録「山本正伯　関彦輔」の筆耕を拝受しました。それによると、山本家は代々「御目医師」、つまり眼科専門の藩医を務めております。

ここで私は輪違平兵衛が山本家に乳母奉公していた女性を妻に迎えた経緯に着目しました。『捜索原証』に「事故アリ妻トナシ（事情があって妻に迎えた)」という奇妙な一節があったからです。密偵は「事故」の内容を記していませんが、私はこのように推測しました。

つまり、「事故（事情)」とは、正伯が奉公人の乳母を誤って懐妊させたことを指すのではないか。正伯は家名を守るために妊娠中の乳母を、出入り業者の輪違平兵衛に「引き取らせた」のではないか。平兵衛が「事故」処理を了承した見返りとして、正伯は平兵衛の子として生まれた自身の子＝良平を「下僕」という名目で手もとに置いて医師修行をさせ、将来に保証を与えようとしたのではないか。正伯はこのことを跡継ぎの山本正にも打ち明け、異母弟を秘かに支援するよう託したのではないか。

そう仮定したうえで、戸籍謄本と密偵調査報告『捜索原証』の内容を比較しますと、さすがに詐称しただけあって、大きな違いのあることが判明しました。すでにご覧いただいた『雑輩』筆耕の「関戸良平」という記名の横に添えられた「輪違」は関戸の本姓でした。『雑輩』作成にあたった役人は、「関戸良平」が越前追放に処された「輪違良平」であることを掴んでいたわけです。

輪違良平が関戸由義として神戸の近代史にその名を刻む過程で迎えた幾つかの転機に照らせば、私

の推測の蓋然性は、低くはないと思います。関戸由義という人物は、人生の岐路に立つたびに、一介の町人では為し難い挙に打って出ているからです。

無論、本人の才覚もあったでしょうが、それらはいずれも福井藩の有力筋に繋がる人間の存在無くしては実現が不可能なことでした。そこに藩医として松平家に仕えた山本正伯父子の存在が、おのずと浮かび上がります。

まず、関戸飛躍のきっかけとなったサンフランシスコ渡航には、関戸と岡倉を結びつける人物の存在が不可欠。それ以上に興味をそそるのは、『捜索原証』に民部省出仕中の関戸が「福井旧知事と相謀り、神戸で事業を起こそうと企てた」旨の記述があることでしょう。この「福井旧知事」とは、春嶽公を指すと考えられます。

民部大蔵省通商司から県外務局勧業課への転属は、どちらも産業振興を管轄する部署であり、下級官吏の職歴形成という視点から眺めると、順当な流れではあるものの、関戸が神戸港を管轄する兵庫県庁に都合よく転属できたのは、果たして偶然なのか……。春嶽公は関戸が民部省に出仕する直前まで初代民部卿の座にありました。

関戸と春嶽公の交際は、松平邸の家従が付けた宿直簿『御用日記』（福井県文書館保管）および春嶽公自身が綴った日誌『礫川文藻坐右日簿』（福井市立郷土歴史博物館蔵）によって確認できますので、ふたつの日誌のなかに関戸の名が登場する箇所を**巻末資料３**に列記しておきました。

たとえば、『御用日記　明治五壬申歳正月ヨリ十二月迄』の「明治五年正月二十八日」には「一唐筆　一箱　一　賀茂川千鳥　一箱　　関戸良平　右献上致候事」という記載があります。おそらくこれが、現存するふたつの日誌に、関戸の名が現れた最初の箇所と考えられます。

さきほどふれました『坪川家文書』にあった密通の件の記載は明治５年８月の条。ことによると、かつての罪人が旧藩主に拝謁したという事件は、当時の福井富裕層の間に噂として広まっていたのかもしれません。

それにしても、かつて追放刑に処された町人身分の者が、四民平等の世になったからといって、数年前までは拝謁に与るなど思いもよらなかった旧藩主と親しく交流できるでしょうか。春嶽公と関戸の間を取り持つ人間の存在無くしては叶わないシチュエーションといえます。仲介者としては、第四代山本正伯のほかに、岡倉や柳本の名も浮上するでしょう。

あるいは、この時期すでに何らかの「士族授産」的な構想を持っていた春嶽公が、関戸の構想していた事業計画を、さきほどから登場している旧家臣から耳にして力を貸す決断を下した、とも推測できます。ちなみに、関戸の構想した事業計画の概要をまとめますと、以下のようになります。

(1) 洋行経験者という肩書と兵庫県官という立場を使って、神戸港での貿易に県独自の関税「五厘金」を設定し、それを財源として、同時に政府官金を扱う三井組や小野組の融資も仰ぎながら、サンフランシスコをモデルとした都市造成計画を推進。

(2) 義弟の左一郎と連携し、サンフランシスコで獲得した利益で造成前の土地を息子・慶治名義で取得。都市整備によって値上がりした土地を賃貸・売却し、賃貸収入と売買差益を私財として蓄積。

(3) 都市計画と不動産取引を巧妙に組み合わせた循環利殖事業で蓄えた私財を、豊臣秀吉の埋蔵金伝説で知られる摂津国多田銀銅山（現・兵庫県川辺郡猪名川町、兵庫県川西市、大阪府能勢郡一帯に点在する鉱山群）と出雲国鵜峠浦・鷺浦（現・島根県出雲市鵜峠・鷺浦）の銅山開発事業に投入。

(1) と (2) が現在の神戸市中央区、つまり多くの方が「ミナト神戸」としてイメージされる空間の原型を造ったといえます。

ついでながら、さきほどから名が登場している福澤と関戸の交際は、関戸がサンフランシスコから帰国し、横浜小西屋の厄介となっていた時期に始まったと推測できます。

いまいちど、横浜地図（**図６**）をご覧いただくと、小西屋近くには福澤の高弟・早矢仕有的が西洋医学書や医療器具を扱う丸屋善七商店を構えていました。現在の丸善雄松堂株式会社の前身です。そこで供された洋食メニューが、創業者の早矢仕有的に因んで「ハヤシライス」と呼ばれて現在に至るというのは、よく知られた逸話ですね。

余談は措いて、関戸が官途に就くきっかけとなった建白書『貨幣之儀』は、伊東玄朴の息子である門屋幸之助が手を貸したものと考えられますが、若き福澤が医学修業に励んだ大坂適塾の主宰・緒方洪庵も種痘の普及に取り組みました。種痘繋がりで福澤－早矢仕－門屋幸之助こと伊東哲之助は、知己の間柄だったと推察されます。小西屋に草鞋を脱いでいた関戸が福澤と知り合いになる機会は十分にあったのです。

福澤は春嶽公とも親しく、明治13年10月13日の『礫川文藻』には、福澤と関戸が訪れたという記述もあります。福澤の伝記には、福澤がチフスを患った際、慶應義塾生が当時珍しかった製氷機を借りるために、春嶽公を訪ねたという逸話も見られます。

付言しますと、関戸の構想した不動産取引と都市造成を組み合わせた循環式利殖事業には、福澤も一枚噛んでいて、余得に与った節があります。これはさきに紹介した福澤書簡からもうかがえますし、実際、神戸地方法務局保管『摂津國八部郡神戸港各町地図』（明治９年作成）には、福澤所有地が数件確認できます。

関戸を介して手ごろな土地を造成前に買い漁り、都市造成による地価値上がりに乗じて売却、大きな差益を得て旧主奥平家の家産を増やし、自身もかなりの儲けを得た、と自慢げに述べています。

福澤が関戸を介して購入したのは、現在でも地価が高そうな神戸中心部の一等地です。官民癒着の見事な土地転がしといえるでしょう。2024年上半期に１万円札の肖像が福澤から渋澤栄一に代わるようですが、福澤も十分に紙幣の顔に相応しい人物といえます。

話を戻すと、国家財政のひっ迫から華士族の家禄・賞典禄の廃止も取り沙汰されていた明治９年５月、福井藩家老を務めた本多敬義（「修理」「大蔵」「波釣月とも称す」）一家が神戸の関戸邸隣接地に移住しています。いまのJR元町駅前山側の北長狭通面した地所です。春嶽公が構想していた士族授産に関連しての動きとも推測されます。

『兵庫縣人物列傳』[18] によると、敬義は神戸元町通で質屋を開業しています。娘・衣（「幾奴」とも表記）の婿養子に迎えた旧岡崎藩士の小柳津精二は、本多精二を名乗り、神戸市会議員、商業会議

所議員等を歴任、教育事業にも尽力して、神戸の名士のひとりに数えられました。

しかしながら、越前福井藩士のための授産事業は、残念なことに、春嶽公や本多敬義が期待したと思しき成果は得られなかったようです。これはひとつには、関戸由義とその相棒（パートナー）左一郎が「私益」に重きを置く人であったことと無縁ではないでしょう。

無論、関戸の都市造成計画はそのまま現在「ミナト神戸」の名で呼ばれる神戸市中央区の原型となりました。その意味で、この義兄弟は「公益」にも尽くしたと申せますが、それはあくまでも「私益」に従属した「公益」であり、彼らの眼には、山本家も春嶽公も本多家も兵庫県も、「私益」の追求にする資する限りで考慮すべき存在と映っていたかもしれません。

この生き方の是非を問うことに、さほど意味はないでしょう。福井城下出身の策士がみずからの才覚を頼りに、新たな時代における立身の梯子（はしご）を登るなかで、越前福井藩の人びとを巻き込みながら、東の横浜と並ぶ西の国際都市神戸の礎を築いたことは、歴史の事実として確定して差し支えないからです。

ついでながら、神戸市は1980年代に六甲の山並みを削って海を埋め立ててふたつの人工島、六甲アイランドとポートアイランドを造成、そこに企業や教育研究機関や医療施設を誘致する都市計画手法で全国に鳴り、「株式会社神戸市」などと称されました。かつてスタップ細胞で一世風靡した理化学研究所は、ポートアイランドにございます。それはさておき、いま改めて、かような手法のルーツを辿れば、案外、福井城下が生んだ稀代のトリックスター関戸由義に行き着くといえなくもないでしょう。

ほかにも、福井藩士の瓜生三寅（うりゅう・さんいん）[19] が明治５～７年まで、初代神戸税関長を務めています。関戸が県官として貿易行政に力を入れていた時期とも重なり、両者の間に交流があったことは想像に難くない。

あるいは、関戸がサンフランシスコに渡航した際、通訳を務めた可能性もある柳本直太郎も、明治10～17年に兵庫県御用掛（ごようがかり）、同県少書記官、同県大書記官を歴任しています。柳本は福澤門下でもあり、やはり関戸とは交流があったはずです。

このように、関戸由義を中心として、越前福井出身者が開港地神戸で織りなした交流は、まことに興味が尽きぬ歴史模様といえるでしょう。「国際都市神戸を造ったのは福井県人 ?!」というのも、決して大袈裟ではないこと、おわかりいただけましたでしょうか。

**おわりに**

福井藩人事資料や春嶽公の日誌、その管理に携わる方々のお陰で、神戸近代史においてこれまで十分に検証が行われないまま放置されてきた関戸由義の事績とその背後に潜む数奇な運命の錯綜をあきらかにすることが叶いました。越前福井藩は幕末維新期に数多（あまた）の人材を各界に輩出しましたが、そのなかには関戸由義のような異色の人物もいた、ということです。

最後に、関戸由義とその一族が辿った運命をお話いたします。関戸は義弟左一郎と諮（はか）り、不動産取引と都市造成を組み合わせた循環式利殖事業で得た私財を、明治10年頃から源平の古（いにしえ）より隆盛を誇った多田銀銅山の再開発に投じます。この頃、神戸市街の造成事業は一段落し、不動産取引も余り差益

を生まなくなっていました。

**図７**の地図に示したように、神戸と多田銀銅山の位置関係は、かつて関戸が密航して利益と知識を得たサンフランシスコと、ゴールドラッシュが起こったシエラネバダの位置関係に似ています。シスコはゴールドラッシュ後に繁華の地となりましたが、関戸は逆に繁華の地となった神戸からシルバー・ブロンズ・ラッシュを夢見て多田に進出したのかもしれません。

ちなみに、地元地主との間で交わした鉱山借地契約に際しては、神戸での不動産取引と同じく、息子慶治の名義を使用しています。また、四男の陽一を分家独立させたうえで多田に転籍させて、みずからは陽一の代理人として地元関係者と誼（よしみ）を通じ、採掘事業に関与しました。関戸の鉱山投資は、さらに島根の鵜峠・鷺浦銅山にも及んでいます。

『明治十年内國勸業博覧會出品解説（礦業冶金）』[20] には、別子銅山の住友、鉱山王の五代友厚、尾去沢の岡田平太に次いで、関戸慶治名義で借りた多田地域4坑における銅の合計産額が堂々の全国４位にランクされております。

ついでながら、三井文庫で私が出会った関戸の戸籍写しには「鑛山商」との記載があります。つまり、本気で鉱山稼行（こうざんかこう）に入れ込んでいたのです。

けれども、好調だったのは当初だけで、結論的に申しますと、多田と鵜峠・鷺浦の鉱山事業は鉱脈埋蔵量の不足や地元民・地生え山師との衝突によって失敗に終わりました。銀・銅の鉱石は「兵庫県の闇将軍」と呼ばれた関戸由義にとって、文字通り躓（つまづ）きの石となってしまったのです。循環利殖商法で得た資金が次第に枯渇するなか、明治20年（1887）に関戸家は福澤を介して多田銀銅山の利権を三菱商会の岩崎弥之助（創業者の岩崎弥太郎はすでに死去。弥之助はその実弟）に売却、翌21年８月17

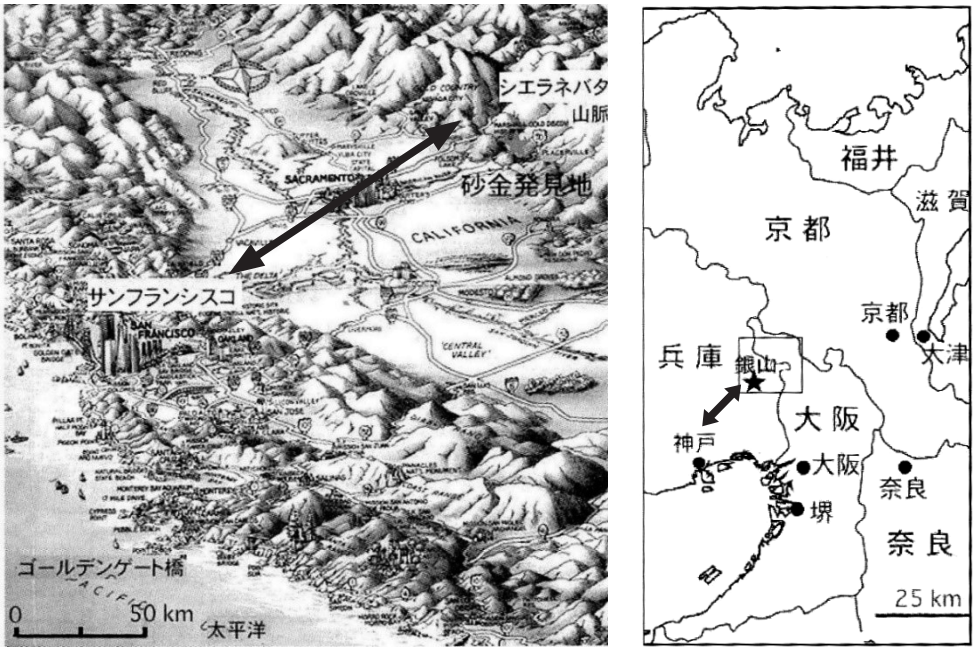


**図７　関戸一族による摂津国多田での鉱山開発事業**
（井澤英二「明治時代前期の鉱業と多田銀銅山」（猪名川町歴史文化遺産活性化実行委員会編・発行『平成28年度　多田銀銅山を活かした地域活性化事業報告書～地域と協働した多田銀銅山普及啓発事業』、2017年３月）p.33より転載）

日に一代の梟雄（きょうゆう）・関戸由義は北長狭通の自邸で60年の生涯を閉じます。

じつは福澤が関戸家と三菱商会の間に入って仲介の労を取ったのは、自身の貸し借りを清算するためでした。すでにふれましたが、福澤は神戸市街地の購入と転売で関戸の世話になり、関戸に「借り」がありました。その一方で、福澤はかつて岩崎弥太郎に長崎高島炭鉱の購入を熱心に勧め、それが三菱に莫大な利益をもたらしたことで、三菱に「貸し」を作っています。関戸から受けた恩に報い、三菱からは借りを返してもらった、ということですね。

**図８**に、三者の相関を図示しておきました。蛇足ながら、当時の三菱商会には初代神戸税関長を務めた瓜生三寅の弟、瓜生震（うりゅうしん）が高島炭鉱支配人として在籍していました。岩崎弥之助の信任も厚かったことから、もしかすると、この三者間での貸借相殺に何某（なにがし）かの関与を行ったかもしれません。

由義亡き後、関戸一族は明治25～28年の間に、神戸市街の所有地所をあいついで処分しています。長男の慶治は神戸三宮町で余生を送り、次男の春雄は東京の村瀬家を継いで、福澤の斡旋でベルギーに留学したあと、東京高等商業学校、いまの一橋大学の教授となり、我が国損害保険論の草分けとして名を馳せました。村瀬春雄の胸像がいまも一橋大学構内に残ります。多田に転籍させられた四男陽一は復籍し、神戸商業学校、現在の神戸大学の前身を卒業後、金融業界で活躍しました。外交官として有名な天羽英二（あもうえいじ）とも仲が良く、『天羽英二日記』[21] にもその名がしばしば登場します。

そして、由義の相棒として循環利殖商法を支えた左一郎。彼は多田銅山に残った借地に住み、土地の親分のような存在となったようです。いまも「関戸親分」の伝承がこの地に残っていますが、いつどのように亡くなったのかは不明です。

横浜より10年遅れで、明治維新の間際（まぎわ）に開港した神戸は、当初から権力の空白地帯として置かれ、さまざまな野心に駆られた人びとを全国各地から呼び寄せました。こうした人びとが「ミナト神戸」という都市空間を造り上げていったのですが、そのなかで関戸由義の存在と役割は特筆されます。

にもかかわらず、事績に関する検証（「調べて正しく証明する」の意）と顕彰（「功績を世間に知らせる」の意）が等閑（なおざり）にされてきたのは、官民癒着による不動産投機と都市造成をタイアップさせた利殖法が余りに巧妙・狡猾であったことから、由義を長とする関戸家の功罪は必ずしも相半ばせず、鉱山事業の蹉跌（さてつ）による家運の傾きとともに、世間のせん望と嫉妬が罪の側面をことさらに強調する方向へと動いたからでしょう。やがてそれが「語るを憚る」から「忘却の彼方に葬る」へと神戸の人びと

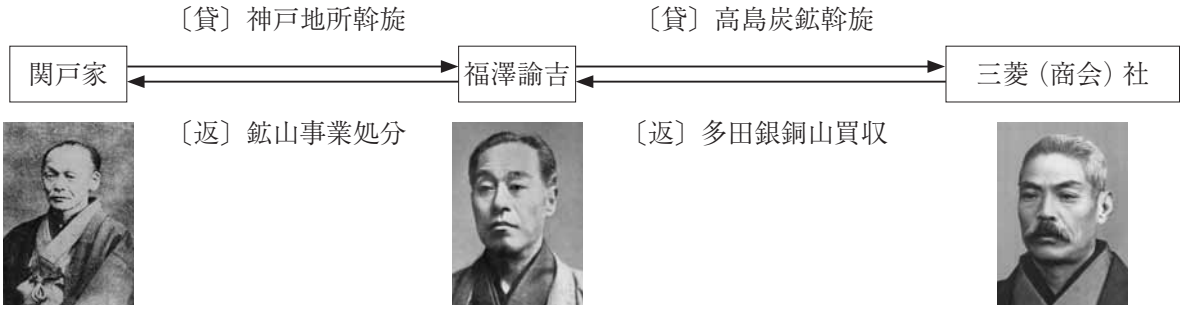


**図８　摂津多田銀銅山の処分をめぐる関戸家・福沢諭吉・三菱商会の相関図**
（松田裕之「「鑛山商」関戸家の内実とその鉱山稼行」（猪名川町歴史文化遺産活性化実行委員会編・発行『平成28年度　多田銀銅山を活かした地域活性化事業報告書～地域と協働した多田銀銅山普及啓発事業』、2017年３月）p.44を修正して転載）

の態度を変えさせていった、そう推察いたします。

さきほどもふれました『坪川家文書』にも、関戸の来歴に関する記載が見られます。おそらく福井県には、まだ発掘されていない、関戸由義に関する史料が存在するのではないでしょうか？

今回の私の講演を機に、これからは関戸由義の故郷である福井県のほうで調査研究が進められることを願っております。じつは本講演の準備段階で、福井県観光営業部ブランド営業課が発行されました『福井の幕末明治　歴史秘話』[22] を読ませていただきました。人物史の形式で55のエピソードが要領よく紹介されており、とても良い企画と存じます。

そこに56個目のエピソードとして、関戸由義による事績も加えて、「ミナト神戸の基は、福井城下出身の奇才が作った」ということを、兵庫県人や神戸市民にお教えいただければと思います。歴史は倦むことなき「上書き」と「更新」によって、深さと正確性を増していくものです。

「福井県と兵庫県の秘めたる関係について」、これにて終わりといたしますが、今回の話に興味を持たれ、工樂松右衛門や関戸由義についていま少し詳しく知りたい方がおられましたら、**巻末資料４**に主だった文献を挙げておきました。参考にしていただければ幸甚です。

**注**

１）廻船はその役割によって、「賃積船」と「買積船」の２種類に分類される。「賃積船」とは運賃輸送を生業とするチャーター船。樽廻船や菱垣廻船がこれに属する。「買積船」とは消費地の価格差を利用して差益を得るために、各地の寄港地で商品の購入・売却を行う商業船。北前船や内海船（尾州廻船）はこれに属する。

２）松田裕之『近世海事の革新者　工樂松右衛門伝－公益に尽くした七〇年』（冨山房インターナショナル、2022年）。

３）松田裕之『港都神戸を造った男－《怪商》関戸由義の生涯』（風詠社、2017年）。

４）慶應義塾『福澤諭吉書簡集〈第１巻〉安政四（一八五七）年 - 明治九（一八七六）年』（岩波書店、2001年）p.251「一三九　島津復生　明治五年十一月七日」。

５）松平文庫 A0143-01098『新番格以下増補雑輩』。

６）早稲田大学図書館蔵『明治三年大蔵省館員録』（書写資料、国立国会図書館デジタルコレクション）収録。

７）朝倉治彦編『明治初期官員録・職員録集成 .』（柏書房、1982年）第３巻・第４巻。

８）以下は、関戸由義のハワイ滞在とサンフランシスコ上陸を伝える『The Hawaiian Gazette』記事である。

（1）1868年5月13日（慶応４年戊辰４月21日）「日本からの訪問者（“Japanes Visitors”）」

「アイダホ号の到着以来、我が駐在員たちは、事業目的の視察旅行で本島を訪れている４人の日本人紳士の一団に注目してきた。丁重さ、快活な陽気さ、そして情報獲得に向けた熱意のお陰で、彼らは歓迎すべき訪問者となっており、我々は誰もが敬意と配慮を以て彼らに接すると信じている。彼らの訪問は、日本と我が国の未来の事業関係と直結しており、彼らが自国に我々に関する良き報告を持ち帰ってくれることを願う。

横浜駐在ハワイ領事は、日本団の長 “Dr. Sekido” について、『まことに当を得た人選であり、ハワイにおける日本人の良き代表となろう。彼は自国品の海外輸出に投資した最初の日本人であり、私にハワイとそこの人々について訊ね、自ら視察することを決めた。彼が帰国した暁には、我が国は日本政府のいかなる質問にも回答できる信頼すべき人材を得ることになろう』と述べている。

“Dr. Sekido” はハワイを訪れ、我国の工芸、労働システム、そして日本との交易において我々が提供できる商売上の利点を視察するであろう。“Ogata Tegiro” なる商人は、以前ハワイに居り、日本より持ち込まれる製品の責任者であった。学徒であり通訳でもある “Zangimoto” は、最近合衆国から戻り、英語のみならず、我々の習慣や生活様式などにも些か通じている。学徒の “Zeguich” は数ヵ月当地に滞在して学校に通い、

英語を習得して商人として自立することを目指している。
思うに、彼らの訪問は日本においてハワイが好ましい印象を持たれていることの最も興味深い証左であり、より良い貿易ならびに国交を将来にわたって築いていけることを予感させるものである」

(2) 1868年 5 月27日（慶応 4 年戊辰閏 4 月 6 日）「商業関連（“Commercial”）」
「土曜の夕刻、バートウ氏 “Mr. Bartow” は、当地ホノルルに滞在する “Dr. Sekido” を介して、呉服を中心とした日本商品を大量に購入した。何人もが取引に立ち会い、価格は公正なものであった」

(3) 1868年 6 月17日（慶応 4 年戊辰閏 4 月27日）「旅行者（“Passengers”）」
「 6 月15日アイダホ号でサンフランシスコに到着　Dr. Sekido、Yeguich Yangimotu 、Ogata Tegero」

9 ）高橋是清口述・上塚司筆録『高橋是清自伝』（千倉書房、1936年）p.68。
10）手塚晃・国立教育会館編『幕末 明治 海外渡航者総覧　全 3 巻』（柏書房、1992年）第 1 巻 pp.495～496、498／第 2 巻 pp.457～462、507／第 3 巻 pp.6～7、37、42、186～187。
11）本多修理著 ; 谷口初意校訂 ; 大久保利謙解題『越前藩幕末維新公用日記』（福井県郷土史懇談会、1974年）p.513、p.531。
12）吉村昭『生麦事件』（1998年、新潮社）pp.21～24。
13）三井家記録文書（三井文庫蔵）収録〈追号1642-4-1〉『關戸由義關戸左一郎戸籍写』（三井銀行京都分店所蔵、1884年）。
14）三井家記録文書（三井文庫蔵）収録〈追号1642-4-2〉『關戸左一郎身分内密取調書』（三井銀行京都分店所蔵、1884年）。
15）『捜索原証』（注13に折り込まれていた資料）。
16）『坪川家文書』（福井県文書館蔵、明治 5 年 8 月13日条）。
17）松平文庫 A0143-02016『姓名録　七　ムウノクヤ』（長野栄俊氏より筆耕したものを提供いただいた）。
18）山内直一編『兵庫縣人物列傳　第一編』（興信社出版部、1910年）「神戸學務委員　本多精二氏　神戸市中山手通四丁目一〇一」pp.86ノ1～86ノ2。
19）福井県文書館編『福井県文書館資料叢書９　福井藩士履歴　1　あ～え 』（福井県文書館、2013年）pp.267～268。
20）日本鉱業資料集刊行委員会『明治十年内國勸業博覧會出品解説（礦業冶金）　日本鉱業資料集　第三期　明治篇』（白亜書房、1983年）p.52。
21）天羽英二日記・資料集刊行会編『天羽英二日記　第3巻』（天羽英二日記・資料集刊行会、1990年）p. 129、p.429。
22）福井県観光営業部ブランド営業課『福井の幕末明治　歴史秘話』（福井県観光営業部ブランド営業課）
https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/brandeigyou/brand/bakumatumeijihiwa_d/fil/fukui_bakumatsu_0528.pdf
（2023年12月12日閲覧）。

**巻末資料 1　一世工樂軒松右衛門略歴**

寛保 3（1743）－1812（文化 9 ）. 8 . 21　江戸中・後期に活躍した海事工学の先駆者。寛保 3 年（1743）播磨国加古郡高砂町の船持漁師釣屋善三郎とその後妻の間に誕生。幼少期に高砂町東宮町の宮本屋長三郎・カチ夫妻の養子となる。播磨灘で漁撈と渡海船での近距離廻漕に親しみ、15歳の頃に摂津国兵庫津西出町の船具商兼廻船業鍛冶屋善兵衛に奉公し、善兵衛の娘ツネを娶る。兵庫津の廻船主御影屋平兵衛の沖船頭として賃積・買積廻漕に従事。兵庫津鍛冶屋町の諸問屋北風荘右衛門貞幹の愛顧を受け、尾州・江戸への賃積廻漕にも従事。天明 5 年（1785）頃より兵庫津匠町の船具商喜多屋二平〔北風別家〕の支援・協力のもと、織帆開発に着手。その柔軟性・速乾性・耐久性が廻船従事者の評判を呼び、「松右衛門帆」として日本各地に普及。また、浚渫・築港用船舶の設計・製作も手掛ける。北風荘右衛門の支援を受けて、御影屋藤兵衛の身代を譲り受け、寛政 4 年（1792）頃に御影屋松右衛門として兵庫津佐比江新地に店舗兼工房を構える。義弟宮本徳兵衛とその実子宮本長兵衛と共に廻船業に従事。兵庫津西出町の廻船業高田屋嘉兵衛とも交流。寛政11年（1799）に幕府の蝦夷地公領化政策が始まると、享和 2 年（1802）2 月に大坂奉行所より択捉島築港を拝命。同年 5 月、択捉島に波止を築造。箱館奉行所御用を務める「御雇」を拝命すると、文化 5 年（1808）閏 6 月まで手船仲吉丸等で択捉・国後・厚岸・虻田会所－函館間の御用荷物の廻漕や漁撈に従事。享和 2 年12月には、蝦夷地開発に協力した功により、松前御番奉行近藤重蔵から「工樂」姓を下賜される。享和 4 年（1804）、耐火性の高い播磨国印南郡産竜山石を使用して箱館に船蓼場を築造。これら一連の港湾普請で発揮した手腕を評価さ

れて文化５～７年（1808～1810）に姫路藩の依頼で加古川支流の高砂川河口の浚渫・高砂湊の改修を指揮。文化７年12月に小倉藩領の伊田川河口の岩礁撤去法を同藩普請奉行に指導。養父の宮本屋長三郎の死去後、文化７年８月に兵庫津佐比江新地より高砂町南浜町に人別替え。姫路藩より一代限「御水主並」を拝命し、「御廻船御船頭」として五人扶持・御切符金10両で召し抱えられる。同年12月～翌文化８年２月に小倉藩より朝鮮通信使応接用船の製作依頼に応じて相生丸を建造。文化８年（1811）２月より高弟の水京屋卯兵衛・岡本屋清兵衛と共に備後国鞆津の波止修復・増築を指揮。文化８年２月に自身が築造した箱館築島を、文化９年（1812）２月に箱館築地船渠を、高田屋嘉兵衛に売却。文化９年８月高砂町内にて発病し、南浜町居宅にて死去。享年70。戒名「工樂軒淵窓徳源天性居士」。

松田裕之『近世海事の革新者　工樂松右衛門伝－公益に尽くした七〇年』（冨山房インターナショナル、2022年）pp.276～277改変。

**巻末資料２　関戸由義とその一族の活動略譜**

| 元号 | 年 | 西暦 | 関戸一族身辺事項 | 政治・経済・社会・文化 |
|---|---|---|---|---|
| 文政 | 12 | 1829 | 10/25　関戸由義、越前国足羽郡呉服下町の薬種商第四代輪違（屋）平兵衛の長男として誕生。幼名は良平。母は同亀屋町の藩医第四代山本正伯宅に乳母奉公した女性 | 3/ 江戸大火 |
| 年月日不明 | | | ［幼年～少年期］良平、母の縁により、第四代山本正伯のもとに下男奉公 | （天保4/1833）<br>天保大飢饉発生（～天保10） |
| | | | ［青年期］父・平兵衛死去に伴い、輪違屋分家を相続 | |
| 天保 | 10 | 1839 | 4/11　山口フキ（ふき）誕生［京都按摩師］ | 12/ 蛮社の獄 |
| 天保 | 14 | 1843 | 2/7　山口左一郎誕生［フキ実弟］ | 3/ 幕府、江戸よりの人返し実施 |
| 年月日不明 | | | ［青年期］<br>○良平、輪違本家二男の妻と密通。本家当主弥一郎の告訴により数カ月の投獄後、越前追放<br>○良平、京都に流れ、客分として按摩師の山口家に厄介<br>○良平、山口フキと結婚 | （嘉永1～5/1848～1852）この頃、琉球にアメリカ、イギリス、ロシア等の外国艦船の来航が頻発<br>（安政6/1859）<br>6/ 横浜開港 |
| 慶応 | 元 | 1865 | 7/26　良平・フキの間に長男慶治が誕生 | 5/ 第二次長州征伐 |
| 年月日不明 | | | 良平一家と関戸左一郎、江戸に移住。良平、医者開業。「関戸」姓を名乗り「関戸由義」と自称 | （慶応2/1866）<br>1/ 薩長同盟成立<br>12/ 福澤諭吉『西洋事情』初編刊行 |
| 慶応 | 3 | 1867 | 3/9 関戸左一郎、江戸福井藩邸出入商人鈴木三右衛門と養子縁組<br>［伝聞］　関戸由義、江戸市中の混乱に乗じ、書画骨董品を安値で大量購入 | 4/ 横浜93番米商ヴァン・リード、『万国新聞』に「アメリカへ学問修業交易又は見物遊歴に渡海被成度ものは随分御世話可申候」の広告掲載<br>12/ 神戸開港（→1868/1/1）<br>12/ 王政復古の大号令、新政府誕生 |
| 慶応／明治 | 4/ 元 | 1868 | 3月上旬　関戸由義、横浜よりサンフランシスコに密航。関戸左一郎、由義の長男・慶治の後見人に<br>5/13［和暦4/11］　同日付『Hawaiian Gazette』が関戸由義と思しき “Dr. Sekido” なる人物のハワイ島訪問に関する記事掲載<br>5/27［和暦閏4/6］同日付『Hawaiian Gazette』に “Mr. Bartow” がホノルルに滞在中の “Dr. Sekido” を介して、呉服を中心とした日本の工芸品を大量に購入との記事掲載 | 1/ 鳥羽・伏見の戦［戊辰戦争勃発］<br>2/ 三井・小野・島田各組、御為替方拝命<br>4/ 神奈川奉行所の認可を得た集団出稼移民42名がグアムに渡航<br>4/ 江戸城開城、討幕軍入城 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | 6/17［和暦閏4/27］同日付『Hawaiian Gazette』の旅行者リストに“Dr. Sekido, Yeguich Yanagimotu, Ogata Tegiro”の名が掲載 | 4/ ヴァン・リード周旋によるハワイ移民「元年組」を載せたサイオト号が新政府の渡航許可なく横浜を出航<br>9/「一世一元の制」制定<br>11/ 神戸村・二ツ茶屋村・走水村を合併、神戸町が成立 |
| 年月日不明 | | | ［不詳］　関戸由義、サンフランシスコより帰国。横濱本町四丁目商人小西屋伝蔵の厄介に<br>［伝聞］　関戸由義、兵庫県に洋学校の設立を建白 | |
| 明治 | 2 | 1869 | ［不詳］　関戸由義、横濱弁天町五丁目商人門屋幸之助と連署で『貨幣之儀ニ付申候書付』作成<br>12/4　関戸由義、民部省通商少佑拝命。朝臣「源由義関戸」を拝称 | 6/ 諸藩主に版籍奉還を許可<br>8/ 民部・大蔵2省を統合<br>12/ 東京 - 横浜間に電信開通 |
| | 3 | 1870 | 9/ 新潟県為替商社への英国書記官アダムス訪問の件につき、関戸由義と新潟県知事平松時厚との間で齟齬発生<br>12/5 関戸由義、民部省通商少佑免官<br>［不詳］　関戸左一郎が「由義」の名で、神戸北長狭通四丁目に関山小学校を開設 | 1/ 回漕会社設立<br>8/ 神戸 - 大阪間に電信開設<br>10/ 岩崎彌太郎、九十九商会［三菱商会の前身］創立 |
| | 4 | 1871 | 3/24　関戸由義、兵庫県外務局少属として出仕<br>3/29　関戸由義・フキの間に次男春雄が誕生<br>5/24～31　神戸為替会社で関戸由義と北風正造の間で軋轢あるも和解 | 3/ 生田川付替工事着工（～6月）<br>4/ 戸籍法制定<br>7/ 廃藩置県の詔書 |
| | 5 | 1872 | 1/28　関戸由義、「関戸良平」の名で、旧福井藩主・松平慶永に「唐筆1箱・賀茂川千鳥1箱」を献上<br>［推定］2/1からの戸籍法施行に際し、関戸由義は「越前足羽郡福井士族山本正伯亡二男」、左一郎は「同三男」、フキは「越前国足羽郡福井士族山口作右ヱ門亡二女」をそれぞれ詐称<br>2/1　関戸由義、兵庫県外務局勧業課少属を免官<br>4/　関戸由義、貿易五厘金紛争を解決。三井組・小野組を社長とする貿易商社の設立に尽力<br>9/16　関戸由義、神戸市中新大道取開掛兼町会所掛を拝命、十一等出仕<br>9/　関戸由義、旧生田川跡整地につき神戸商人加納宗七に大道敷設を進言<br>11/　関戸由義、福澤諭吉に湊川神社前土地を3,400両で斡旋 | 2/ 戸籍法施行［壬申戸籍］土地永代売買解禁<br>3/「鑛山心得書」制定<br>7/ 大蔵省達で全国に地券交付<br>11/ 加納宗七、旧生田川跡整地着工<br>12/ 太陽暦採用にともない明治6年1月1日に→以降西暦と和暦の月日が一致 |
| | 6 | 1873 | 2/　関戸由義、諏訪山山麓に鉱泉開削。長男慶治の名で、温泉郷の開発と温泉郷一帯を「関山町」と命名する申請書を兵庫県に提出<br>11/　栄町通竣工にあたり、関戸由義が石川季遠と共に、各町副戸長連署の頌徳表を奉受<br>［不詳］関戸由義、神戸市各区の共同墓地を統合。城ケ口に近代的な共同墓地を新設<br>［不詳］関戸由義、神戸港改築と水道整備を唱導 | 3/ 摂津三田藩九鬼家の主従が開発途中の栄町通に輸入会社「志摩三商会」を設立<br>5/ 加納宗七が旧生田川跡を整地し、幅18メートル、南北1.6キロメートルの瀧道筋［現フラワーロード］敷設<br>7/ 民営鉱山に関する統一的鉱業法典「日本坑法」制定<br>7/ 地租改正条例布告 |
| | 7 | 1874 | 2/9　関戸由義、兵庫県庁舎の新築に際し、慶治名義の所有地を396円80銭1厘で兵庫県に売却<br>3/　関戸由義、神戸元町六丁目の駅逓寮出張所神戸郵便役所地43坪8合を建物共350円で買取り<br>7/　関戸由義、長男慶治の名義で、イギリス人ジョゼフ・エリオットより山手地所を買取り | 2/ 佐賀の乱勃発<br>5/ 神戸 - 大阪間に鉄道開通、仮営業開始<br>10/ 加納宗七が八部郡小部村堂ノ前における石炭試掘を兵庫県に申請 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | 8/31　関戸由義、神戸郵便役所造営に参画<br>9/18　関戸左一郎、神戸北長狭通外五十ケ町戸長役場の副戸長を拝命<br>10/30　関戸由義、栄町六丁目郵便役所地200坪9合及び東隣地42坪を、690円で売却<br>［不詳］小野組閉店に伴い、同組からの融資の抵当とした諏訪山温泉郷が大蔵省国債局に接収 | 11/ 小野組破産閉店 |
| | 8 | 1875 | 3/3　関戸由義、長男慶治の名義で、兵庫県川辺郡の銀銅山地帯［民田村鳴出・立鉉・厚朴、広根村字金懸間歩、銀山町珍幸・櫻、南田原北浦・石金等］を借区し採掘開始<br>4/8　関戸由義、長男慶治の名義で、エディ・メイフィールドとの間に、北長狭通二丁目の所有建屋・地所の貸借契約を締結<br>5/7　関戸由義・フキの間に三男五三郎が誕生<br>6/　関戸由義、長男慶治の名義で、兵庫県川辺郡国崎村の桐山坑から松ケ原坑に至る鉱山地帯を同村方総代理より無期限借区し、採掘開始<br>［伝聞］関戸由義、ジョゼフ・ヒコに、神戸市街造成と不動産投機に関する野心を告白 | 5/ ジョゼフ・ヒコ、北風家と合同で製茶輸出開始<br>10/ 加納宗七が神戸港東側に55,000坪の船溜を築造 |
| | 9 | 1876 | 3/11　関戸左一郎の妻美弥が死去<br>5/　旧福井藩家老・本多敬義一家が神戸北長狭三丁目の関戸所有地に移住<br>8/22　川辺郡銀山町戸長より関戸慶治に「鉱山開坑につき地貨金受取証」交付<br>11/　関戸由義、長男慶治の名で、栄町通火災に際して罹災者に義捐金を寄附<br>12/22　関戸由義・フキの間に四男陽一が誕生 | 3/ 廃刀令布告<br>9/ 森岡昌純、兵庫県令就任 |
| | 10 | 1877 | 11/30　四男陽一、摂津国川辺郡銀山町十七番地に転籍して分家<br>12/3　関戸左一郎、東京府第五区御徒町三丁目本口義雄の伯母・多かと結婚<br>12/28　関戸由義、神戸商業講習所の開設にあたり、神戸区北長狭通四丁目四〇番地邸内の木造瓦葺ペンキ塗り二階建て洋館を、校舎として兵庫県に提供<br>［不詳］関戸由義、九鬼隆義等と共に、英和女学校（神戸女学院の前身）に寄附<br>［不詳］『明治十年内國勸業博覧會出品解説』収録の金銀銅主要鉱業人に兵庫川辺郡民田村の「関戸慶治」が掲載 | 2/ 阪神間鉄道正式開業<br>2/ 西南戦争勃発（～9月） |
| | 11 | 1878 | 1/4　関戸由義、松平慶永より端書にて年頭祝辞を受領<br>2/14　関戸由義、松平慶永より「海苔一鑵送ル」との直書を拝領<br>6/23　関戸左一郎・多かの間に二男三治が誕生<br>12/10　関戸左一郎・多か離婚 | 3/ 神戸商業講習所の開学許可<br>5/ 大久保利通暗殺<br>5/ 伊藤博文、内務卿就任 |
| | 12 | 1879 | 6/28　関戸左一郎、神戸北長狭通三丁目の旧福井藩家老本多敬義の長女（庶子）恵津と結婚<br>6/29　関戸左一郎の妻恵津が死去<br>夏／　関戸由義、伝染病予防のために硫酸鉄1万ポンドを寄附<br>7/11　関戸左一郎、出雲国神門郡鵜峠浦中山の「試掘願」を提出<br>9/30　関戸由義、華族会館部長局に松平慶永を訪問<br>10/2　関戸由義、東京松平邸の晩餐に招待<br>11/25　関戸由義、松平慶永より博多帯・半紙・海苔・羽織紐・錦絵などを拝領<br>12/　福澤諭吉より関戸由義に交詢社加入の誘い。<br>12/19　福澤諭吉より小幡篤二郎宛書簡に「神戸の関戸由義も入社の筈」の一節 | 1/ 神戸町と兵庫・坂本村が合併、神戸区が成立<br>3/ 松山でコレラ発生、全国に蔓延<br>9/5兵庫県商業講習所を元町三丁目六九番地生島四郎左衛門の持家に移転 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 13 | 1880 | 初冬／　関戸由義、東京製靴商西村勝三による諏訪山温泉郷の払い下げ申請に対抗して、前田又吉と共に諏訪山温泉郷の払い下げを大蔵省国債局に申請<br>7/ 前半　関戸由義、東京で福澤諭吉と面談<br>10/18　関戸由義、松平慶永に菓子2箱を献上<br>10/28　関戸由義、松平慶永に松茸1籠を献上<br>11/1　関戸由義、上京して松平慶永に交肴1籠を献上<br>11/12　関戸由義、松平慶永より生菓子1箱・鴨1羽を拝領<br>11/16　関戸由義、東京松平邸を訪問、牛肉缶詰2個を献上<br>12/30　関戸慶治が上京、湊川神社宮司折田年秀と共に古道具店を訪問 | 1/ 交詢社発会式<br>11/ 大蔵省、かつて小野組が関戸に融資した金額の1割5分増の額を以て、神戸区への諏訪山温泉地払い下げ認可 |
| | 14 | 1881 | 8/11　関戸由義、交詢社兵庫支社に加入 | 10/ 明治十四年政変 |
| | 15 | 1882 | 1/8［推定］関戸由義より村野山人宛書簡「昨日より俄ニ頭瘡痛ヲ発し水蛭ヲ付候」<br>1/9　関戸左一郎、戸長役場副戸長を退任<br>4/15　由義・左一郎の「戸籍上の父」第四代山本正伯が死去<br>12/30　関戸由義、朝鮮行途中の福澤諭吉門下生［井上角五郎、牛場卓蔵、草郷清四郎等］を神戸吟松亭で接待<br>［不詳］この頃、「関戸一族が落魄」との噂流布 | 6/ 日本銀行条例制定→10/ 正式開業 |
| | 16 | 1883 | 6/　関山小学校廃校<br>7/6　関戸由義の次男春雄、東京府日本橋区新右エ門町の村瀬サダに養子縁組<br>7/6　関戸由義の三男五三郎、同上町34番邸の清水イトに養子縁組<br>12/31　工部省鑛山課『鑛山借区一覧表』掲載の主要鉱業人格付けから関戸慶治の名前が脱落 | 11/ 鹿鳴館開館式 |
| | 17 | 1884 | 1/4　関戸由義、退隠。長男慶治、関戸家を相続して戸主に<br>6/6　関戸由義の三男五三郎、清水家より関戸家に復籍<br>［不詳］関戸左一郎、神戸為替会社米会所訴訟費の返済をめぐり三井銀行と係争開始（～翌18年）<br>［不詳］三井銀行京都分店、関戸左一郎の素性を内密に調査 | 9/ 加波山事件発生<br>10/ 秩父事件発生 |
| | 18 | 1885 | 4/19　関戸慶治、出雲銅山の検査につき、出雲大社宮司千家尊福への照会を折田年秀に依頼<br>5/　関戸由義、「出雲國神門郡鵜峠浦山内船谷鑛山借区願」を提出<br>年末／　関戸慶治、「兵庫県摂津國川辺郡広根村字櫻井大金坑借区願」を提出 | 3/ 福澤諭吉『脱亜論』発表<br>4/ 森岡昌純、兵庫県令退任<br>12/ 太政官廃止、内閣制度設置にともない第一次伊藤内閣成立 |
| | 19 | 1886 | 4/11［推定］関戸由義より村野山人宛書簡「三宮御退庁より御来臨之程」<br>12/ 関戸由義と船谷鉱山債主等の間に紛議が生じ、鉱業権を債主側に譲渡<br>［不詳］関戸慶治、摂津国川辺郡の猪渕・国崎で鉱業権を取得 | 10/ ノルマントン号事件発生<br>不詳 村野山人、神戸区長退任 |
| | 20 | 1887 | 2/ 三菱商会が関戸慶治名義の借区地を含む多田一帯の鉱山を買収<br>8/1 関戸由義、九鬼隆義等と共に、神戸元町四丁目に私立女子手芸学校を設立<br>［不詳］関戸慶治、有志等と大阪府能勢郡の鉱業権を共同取得。採掘許可を申請 | 5/ 加納宗七死去 |
| | 21 | 1888 | 8/17　関戸由義、午前9時に神戸市北長狭通四丁目自邸で逝去<br>8/18　『神戸又新日報』関戸由義の死亡記事掲載。関戸左一郎、同紙に関戸由義の死亡広告を掲載<br>8/19　午後3時、関戸由義の亡骸出棺。城ケ口墓地に埋葬。のちに追谷墓地第19区に改葬<br>8/22･23　関戸左一郎、『神戸又新日報』に由義葬儀の会葬者への御礼広告掲載 | 1/ 山陽鉄道会社創立<br>1/ 藤田積中死去 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | 9/23　神田兵右衛門・小寺泰次郎・村野山人の発起で、湊川神社において関戸由義・藤田積中のための神道・仏教・キリスト教による追善例祭開催 | |
| | 25～27 | 1892～94 | 関戸左一郎・関戸慶治・村瀬春雄が、神戸市街の所有地を売却［不詳］　関戸左一郎摂津国川辺郡民田に移住 | |
| | 29 | 1896 | ［伝承］8/30～31　関戸左一郎、大路次川の氾濫で被災した民田千軒の横田歌母娘を保護 | 9/ 生野鉱山、三菱合資会社に払下げ |

松田裕之『港都神戸を造った男　《怪商》関戸由義の生涯』（風詠社、2017年）収録「関戸家略年譜」pp.206～217を改変。

**巻末資料３　日誌類に見える関戸由義と松平春嶽の交流**

・『御用日記』明治五壬申歳正月ヨリ十二月迄

◇明治五年正月二十八日

一　唐筆　一箱

一　賀茂川千鳥　一箱　　関戸良平

右献上致候事

（以上、福井県文書館保管 松平文庫『御用日記』より ）

・『礫川文藻坐右日簿』

◇明治十一年一月四日　微雨　１金

神戸関戸波釣月「本多修理」へ端書郵便祝詞差出

◇同年二月十四日　好晴　２木

関戸由義・波釣月・高村高・浅見岱輔へ以直書海苔一箱宛ヲ送ル、右ハ大野規周家来豊島竹蔵帰坂ニ付同人へ托ス

・『礫川文藻』第二十三号

◇明治十二年九月卅 ( 三十 ) 日　晴雨大風八十度半　５火

関戸由義部長局へ罷出

・『礫川文藻坐右日簿』

◇明治十二年十月二日　小雨六十九度　１木

関戸由義相招、吸物・酒肴・晩餐ヲ出ス、村田氏寿接伴トシテ罷出、同席談話ス

◇同年十一月廿五日　陰五十一度　４火

博多帯壱筋・江戸川製紙場製半切三〆・角干海苔ブリッキ入弐箱・羽織帯壱筋・錦絵数枚

関戸由義へ過日出京之節之呈上物之挨拶トシテ、右之品以直書送ル

・『礫川文藻坐右日簿』

◇明治十三年十月十八日　半晴六十七度半　３月

関戸菓子二箱ヲ呈ス、福澤諭吉へ錦糸煙壱箱・雲丹三合、和田義郎へ雲丹三合、康荘之義ニ付過日配心之挨拶

◇同年十月廿八日　陰六十五度　４木

神戸関戸由義ヨリ、松茸壱籠ヲ呈ス

◇同年十一月一日　晴五十七度　１月

関戸由義今般上京ニ付、交肴壱籠ヲ呈ス

◇同年十一月十二日　陰雨五十三度　２金

関戸由義過日呈上物ノ挨拶トシテ、生菓子一箱・鴨壱羽武田正規ヨリ以テ書状贈之

◇同年十一月十六日　晴五十七度　３火

関戸由義来邸面会ス、牛肉罐詰二個ヲ呈ス

（以上、福井市立郷土歴史博物館保管『礫川文藻坐右日簿』より）

**巻末資料４　参考文献**

【工樂松右衛門関連】

・高砂市教育委員会編『工楽家文書調査報告書』（高砂市教育委員、2019年）。

・高砂市教育委員会編『工楽家文書目録』（高砂市教育委員会、2019年）。

・六世工楽長三郎『工樂家三世略傳』（神戸大学附属図書館蔵、1922年）。

・首藤充康「工樂松右衛門傳」（『全日本重布新聞（現『産繊新聞』）』連載、1954年１～６月）。

・松岡秀隆『工樂松右衛門略敍』（友月書房、2009年）。

・NPO 鞆まちづくり工房編『工樂松右衛門の謎とき　八ヶ年に及ぶ調査報告と一九八年振りの解釈にもとづいて』（NPO 鞆まちづくり工房、2009年）。

・高砂市教育委員会編『風を編む　海をつなぐ　工楽松右衛門物語』（高砂市教育委員会、2013年）。

・高砂市教育委員会編『湊とともに－工楽松右衛門と高砂－』（高砂市教育委員会、2020年）。

・松田裕之『近世海事の革新者　工樂松右衛門伝－公益に尽くした七〇年』（冨山房インターナショナル、2022年）。

【関戸由義関連】

・川嶋禾舟（右次）「関戸由義氏事蹟一斑」（『兵庫史談』２巻６号、1933年６月）。

・赤松啓介「都市計画の先覚　関戸由義」（『神戸財界開拓者伝』太陽出版、1980年）。

・松田裕之『草莽の湊　神戸に名を刻んだ加納宗七伝』（朱鳥社、2014年）。

・松田裕之「関戸由義事績考－神戸市街造成の謎を追って」（『神戸学院大学経営学論集』第11巻第１号、2014年９月）。

・松田裕之「神戸市街を造った影の主役について－関戸由義と関戸慶治の仕事から」（『神戸学院大学経営学論集』第12巻第１号、2015年９月）。

・松田裕之『港都神戸を造った男《怪商》関戸由義の生涯』（風詠社、2017年）。

・松田裕之「関戸由義の来歴に関する新知見－三井家記録文書より」（『神戸学院大学経営学論集』第13巻第２号、2017年３月）。

・松田裕之「「鑛山商」関戸家の内実とその鉱山稼行」（猪名川町歴史文化遺産活性化実行委員会編・発行『平成28年度　多田銀銅山を活かした地域活性化事業報告書～地域と協働した多田銀銅山普及啓発事業』、2017年３月）。

〔付記〕本稿は令和４年（2022）８月28日に、福井県立図書館多目的ホールで行われた講演会「福井県と兵庫県の秘めたる関係－北前船から市街造成・鉱山開発まで－」に補筆・修正を行ったものです。